

成田 歴史 玉手箱

●58回●

歴史と伝統文化の
まち・成田。市内に
は、歴史ある文化財
が多数あります。

余興がはじまり、座は最高潮に



成田のおどり花見と女オビシヤ

300年の伝統を受け継ぐ女性たち

毎年4月3日、成田の町中では、揃いの着物と肩には手拭をかけ、花かんざしを髪に挿した女性の踊り歩く姿を見ることができます。「成田のおどり花見」と呼ばれ、門前町を構成する旧成田町7カ町内の女性たちが、年番(本町 仲町 上町 幸町 花崎町 田町 東町)で行う伝統行事です。三宮壇生神社を出発とし、各町内に祀られている16カ所の神仏を参拝し、それぞれの場所で称え歌を歌い、太鼓と歌詞に合わせて弥勒踊りを踊ります。1日中踊り歩き、すべてを終えるころには日も暮れています。

この踊りは茨城県から伊豆方面に広く分布する弥勒信仰の一つですが、成田の場合は歌詞の最後に「あんば大杉大明神、悪魔を祓ってヨイヤサ」とあるように、江戸時代に疱瘡除けの神として流行した茨城県稲敷市(旧桜川村)の大杉神社信仰も加わった踊りです。約300年前の元禄年間から伝えられたもので、昭和39年には千葉県無形民俗文化財に指定されました。

当番でないほかの女性は、自町内の神仏の前でおどり花見の一行を迎え接待をします。ことしの当番町・本町の世話人代表・土井きよ子さんは「新成田市の誕生時に7年に一度の大役を迎えるのも何かの縁。門前町に300年も続く歴史ある行事で熱の入れ様は特別です。踊りや歌の練習も今が佳境で町内の皆さんの協力で感謝しています」と言います。



本町(右)から仲町(左)へお籠が渡される(平成18年2月18日、若松本店で)

子安観音の旗を先頭に自町の宿へ向かう仲町の皆さん(平成18年2月18日)

このおどり花見を支え・運営しているのが7カ町内の女人講の皆さん。毎年2月18日に各町内で行われる女オビシヤでは、7年に一度回ってくるお籠(御神体)を次の町内に引き継ぐ儀式が催されます。ことしは本町から仲町へお籠が受け渡されました。一般的には神様を受けた側がおどり花見の当番となりそうですが、ここでは送った側が当番となります。これは1年間大切にお籠を守り終え、その労いに踊って花を見るという意味もあります。

ところで、受け渡し式ではお客である仲町から「お籠を迎えに来た」という意味の歌が歌われ、接待側の本町からも「送る」意味の歌が歌われます。そして歓迎の気持ちやお茶や料理を称える歌などを交換、優雅な舞や余興が披露されるなど、古式ゆかしい雅の世界を見ているようです。無事受け渡しが終わると仲町の皆さんは、子安観音の旗を先頭にお籠を抱え自町の宿に戻り、立場を逆転し本町さんへの慰労の宴席を設けます。列をなし静々と歩く光景に偶然通りかかった参拝客も「何の行列?」と足を止めます。この二つの伝統ある行事は、親から子へ、子から孫へと口伝えによって継承されてきたもので、成田に春の訪れを告げる風物詩となっています。



JR成田駅東側の花崎町権現様で弥勒踊りを披露する昨年の当番町・東町の皆さん

編集後記

冬父、小浮、堀籠。とかく地名や人名には読めない字が多々ありますが、これは今度合併する下総町と大栄町にある地名です。皆さんは読めましたか。答えは「とぶ、こぶけ、ほうめ」(4、5ページ参照)です。仕事柄、広報課の職員は市

内の地名と位置を覚えるのは必須。取材先の場所も地名も分からなくては話になりません。新しく増える字数は49、現在市内の町・字数が140。逆に両町の職員はもっと大変でしょうが、しばらくは地図とにらめっこです。